

金澤細見圖譜に、二、丸には長氏の屋敷あり。三、丸異風の稽古所の地は村井豊後守長頼の屋敷などありて、國初の頃は本身の藩士共の居第に渡され、居住せしと也。

○芳春院殿館跡

其の遺跡今詳かならず。按ずるに、寛永八年本丸殿閣延焼に付き、今の二、丸を本城となし給はんと幕府に伺ひありし時、幕府老中連署の奉書に、依、火事二、三之丸ひとつに被成、御作事可有之に付而、芳春院丸西之堀被成御掘度之旨被仰上云々。とある芳春院丸の地、即ち居館の遺蹟にて、其の昔二、丸と稱せし曲輪なりしかど、芳春院君爰に居館し給ふにより、芳春院丸と呼ばたりしと聞ゆ。此の地に居館を造營ありしことは、菅家見聞集に、慶長十九年六月上旬、芳春院殿江戸より金澤へ歸り給ひ、二、丸に屋形造營ありて入り給ふ。といひ、三壺記にも、芳春院殿金澤へ御歸着ありて、本丸へ入らせ給ひ、其の内に二、丸に御屋形を新たに御造營ありて、八月上旬に御移徙あり。と見えたり。按ずるに、慶長十九年六月、武州江戸より歸國し給ひ、本丸へ入城、扱二、丸に新殿造營ありしは、翌廿年の春に

て、其の秋本丸より移り給ひたるならん。利政君の書簡に左の如く載せられたり。

去七日之書狀令披覽候。就中芳春院御息災之儀、何より致満足目出度候。御屋敷も出來候哉、是又珍重に候。隨而御陣觸之由、上下共に大儀と推量候。下略。

卯月十一日 孫四利正判

生嶋主計殿

去月廿四日之書到來、具令披見候。其許之様子聞届、無事之由尤候。殊芳春院殿御息災、家令音尾被移候段、珍重候。此方無替儀候。猶期後音候間令省略候。恐々謹言。

十月六日 孫四利正判

生嶋主計殿

右の親書にて見れば、慶長廿年四月新殿落成、九月移徙の事ありしと聞ゆ。さて元和三年七月十六日、此の屋形にて逝去し給へりといへり。

○芳春院殿略傳

本藩略譜に云ふ。高德公小君高昌氏。諱松。左京大夫吉廣女。石見守定吉姑也。按吉廣父。左京大夫吉直也。嫡子左

門吉光。其子石見守定吉云。或云。土方氏勘兵衛雄久之姑。

或云信長同朋篠原高阿彌女。皆非是。土方氏篠原氏俱其外屬也。故謬。夫人爲人賢貞。多内助焉。元和三年丁巳七月十六日。薨于金澤城。某月某日移葬于平安城北紫野大德寺境内。號芳春院と。前田家略譜に云ふ。小君芳春夫人

者。尾州山田郡高昌城主高昌左京大夫吉直孫。左京大夫吉廣女也。天文十六年七月九日生于尾州。吉廣有六子。長男稱左門。長女芳春夫人。自餘弟妹四人云々。元和三年七月十六日逝去。享年七十一。號芳春院殿華嚴宗富大姊。葬于加州石川郡野田山。とあり。三州志彙纂餘考に、高昌氏の元祖は鎌倉の住士前田右衛門吉雄、享徳二年卒す。其の子斯波家の士高昌左京大夫吉邦、文明九年卒す。其の子織田家の士左京大夫吉直文龜元年卒す。其の子左京大夫吉廣、天文十七年卒す。其の子左門吉光。其の子石見守定吉と高昌譜に載せたり。一説信長公の同朋篠原高阿彌の女と云ふは非也。然れども松雲公夜話録に、芳春君の父は信長公の弓頭篠原主計也とあり。參考すべし。といへり。平次按ずるに、篠原主計が事は、參議中將綱紀卿未だ幼年にましま

す頃より、古老の傳話を聞召したりけん。中村典膳の夜話録に、芳春院様の御父は篠原主計と申山、享保七年四月七日に御意也。右主計は信長公の御弓頭に候由、其後御意御座候。と見ね、綱紀卿寛文十二年に、利長卿在世以來の事を、存命せし古老共に記憶の趣をば穿鑿し給へる壬子集録に載せられたる、大石齋宮が手紙にも左の如く載せたり。

芳春院様御親父様篠原主計殿御儀不奉存候。せがれ之時分に御座候へば、一圓承候覺も無御座候。以上。

閏六月廿三日 大石齋宮判

横山志摩様

又芳春院君御嫁娶・入興等の事は、横山外記が覺書に左の如く載せたり。

芳春院様御興入之御時分之儀、慥覺申者無御座候。乍然高德院様御十三之時分御興入に而、芳春院様とは九つ之違に而御座候と申儀、御國にて古き者共申傳たる儀之由、私父式部召仕申候倉知宗左衛門と申もの、覺候而爲申聞候。其以後荒木六兵衛妹妙祐と申候女、老人に而御先祖様之御儀能覺申聞候内、右之通高德院様御興入、芳春院様とは御